

第五章

小野は少しく色を作して、苦笑しながら怒つた。「ぢやあ云ふわ。」と、冬子はそれだけの重圍を受けながら、素直に微笑しながら云ひ出した。「下島さんは目白の寮舎よ。それから藤井さんは下谷御徒町三丁目五十八番地。——それでよくつて。」
「え、結構です。——どうも有難う。」
そんなことも小野に取つては、一種の淡いながらに彼女の影を、脳裡に濃くして行つた原因だつた。

二人の淡い交渉に就いては、それからかういふこともあつた。それは通夜の第二夜のことだつたが、前日来殆ど不眠不休で、通夜と玄關の應接に努めてゐた小野たちは、まだ明日の用務も控へてゐるといふので、未亡人の親切な命令に依り、その夜の通夜は免除された形で、一とまつ身體を休めるために、交代で寝ることになつた。もう宵の口を過ぎて、弔問者も少くなつたし、また少し疎かつた同年輩の弟子たちも、凶報に驚いて集つて来て、その人たちの手傳ひも増えたので、小野と原田とは安んじて、後を黒田や杉浦やその他の人々に任せて、寢室と定め

その奥の八疊には、平常は令嬢たちの勉強部屋らしく、形ばかりの床の間には、小型な本立や一輪挿しなどが、可愛らしく置き捨てられてあつたが、——既にもう弟子の誰彼が、閉を見ては寢に來

た後と見えて、所狭きまで亂雑に、布圍や夜具が敷きつ放しになつてゐた。手當り次第に持ち込んだものと見えて、中には令嬢たちのものでもあるのか、裏の赤い派手な夜具や、可愛い括り枕などまであつた。が、他の人たちと同じやうに、小野と原田もそんな事に頓着してはゐられなかつた。彼らはその部屋に入ると、その亂雑な彩りに、鳥渡呆れたやうな顔を見合せたが、殆ど遲疑する餘裕もなく、その中の一つを選んで、着のみ着のまま、寝なければならなかつた。

小野は早速向うの隅の、壁側の一つへ藻り込んだ。そしてもつと誰か、後から寢に來るのを妨げないやうに、びつたり壁側へ寄り付くやうにして、小さくなつて身を横へた。原田もその次の床へ並んで入り込んだ。かうして二人は、一言一言何か話してゐる中に、さすがに前夜來の疲れで、不安ながら深い眠りを、寧ろ肉體的な眠りを、すつかり寢入つて了つてゐた。……

と、眞夜中頃の事だつた。急に部屋の中ががやくと騒がしいので、眠りからぼつかり眼を覺して見ると、五六人の令嬢たちが、向うの入口の襖戸の傍に、一と塊になつて立つたまま、部屋の中を見渡してゐた。彼女らも通夜の座から、夜が更けるまゝに解放されて、こゝへ寢に來たに違ひないらしく、亂暴に引摺り出されて、敷きつ放しにされた自分たちの布圍や、その男子の寄宿舎にもありさうにない亂雑さを、呆れながら感嘆の言葉を發して、驚いたり怒つたりしてゐるのだつた。

「あらまあ、こゝへ私たちも寢るの。」
甘つたるい作り聲のやうな、二番目の令嬢のとすぐ知れる、聲がかう云つてゐた。寢呆け眼に、近眼鏡を取外してゐるので、そのそれ／＼の令嬢たちの姿は、小野にはまるで見えなかつた。

「さうよ。だつて外に寢る處つて無いぢやないの。」
さう答へたのは少し年嵩の、長女の聲に違ひなかつた。

「あらさう。——私、厭だわ。こんな處へ寝るの。誰か寝てるんですもの。」
 今度は小さな末の娘の、甲高い聲がした。

「それにこれつきりしか布団がないの？」

「寒いわねえ。」

「きつと風邪を引くわ。」

「私、厭だわ。」

かう口々に彼女らは云ひ合つて、そして更に一緒に聲を揃へては、

「ねえ。——」と間投するのだつた。

「姉さん。私は一體どこへ寝るの。」

「どこへでも空いてる處へ入ればいいぢやないの。」

また長女の指圖するらしい聲がした。

「だつて床は三つしかないぢやないの。」

「だから一つの二人づゝ入つてお寝なさい。さうすれば暖かよ。」

「でも私の布団がないわ。」

「どれでもないぢやないの。今そんな事云つたつて駄目よ。こゝに敷いてある通りに、他人の布団で我慢するのよ。——私のだつて無ぢやないの。」

「あら、彼方の人が掛けて寝てるわ。圖々しいわね。誰でせう。」

また小さな娘の聲がした。

「あら友子さん。そんなこと云ふもんぢやなくつてよ。お客さまの眼が覚めるわ。」

長女のらしい寤める聲がした。

小野はもう先刻から、起きてちつと様子を窺つてゐたが、その時むつくり首を上げた。気がついて見ると、彼の掛けてゐた布団は、裏の赤い女物だつた。彼は少し起き上るやうにして、突然云ひ出した。

「あ、御免なさい。貴女がたの寝る處を奪つて、大變失禮しました。今、起きますから、……」

小さな令嬢たちは、むつくり起き上ると急に、膨れぼつたい赤い眼を強ひてはち／＼させながら、眞面目腐つてかう云ひ出した小野を見ると、黙つて顔を見合せたが、やがてすぐ／＼と笑ひ出した。

が、長女なる人はさすがにかう言つて、その小野の起きようとするのを止めた。

「あら、いゝんですよ、此方にあるんですから、どうぞその儘にしてゐて下さい。お起きにならないでも、大丈夫ですから。……」

さう云はれると小野は、惜しい眼りを破られて、まだ十分に寝足りなかつた際なので、さうですか、ほんとに差支へないんですか。」

と、腰を据ゑたい氣持にならざるを得なかつた。

「さうの間にか起きてゐた原田も、その時顔を上げて云つた。」

「ぢやあ私がこゝを退きませうか。小野君と一緒に寝ればいゝんですから。ねえ、小野君。」

「え、さうし給へ。さうすればもつと餘裕ができるでせうから。」

「いえ。」と令嬢は併し少し慌て、打消すやうに云つた。「そんな事ならいゝでもようございませうわ。どうか此まんまで。……困るわ、そんな事しちやあ、原田さん。貴方の寝た後へなんぞ、誰も寝

やしないことよ。」

彼女は幾らか親しみと反感とを以て、かう答めるやうに云つた。
 「さうですか。では失禮します。」

原田も苦笑して、さう承服せざるを得なかつた。
 「ぢやあ御免下さい。」

小野もその言葉をいゝ事にして、再び頭を枕につけた。彼はもつと寝たかつたし、また令嬢たちと一緒に、かうして一室に寝ることも、微かな風情と感じないではなかつた。
 「いゝえ、此方こそ。折角お寝みになつた所を、お起して済みませんでした。——さあ、春子さん

も桂子さんも早くお休みなさい。」
 「私、此方の端よ。」一番目の令嬢らしいのが、甘い派手やかな叫び聲を揚げた。「智イチちゃん！ 此方へいらつしやい。」

「あら、私？」その時まで全く控目に、たゞ伴奏的に聲を合せてゐるのみだつた、その智イチちゃんと呼べられた令嬢らしいのが、かう答へてゐた。「大きい者ばかりぢやア、寒くないこと？」
 「大丈夫よ。一緒に寝ませうよ。」

すると小さい方の妹同志も、それに對抗するやうに云つてゐた。
 「ぢやア、小姉ちゃん、二人で中央の布団へ寝ませう。」

「うむ。寝ようかね。」三番目の令嬢は、わざと大人ぶつた云ひ方をして、自分のその道化に、にこりともせず澄ましてゐた。「そして大きい姉さんは、一人で彼方の端へ寝かす、と。——」
 「あら、厭よ、私、此方の端なんて。」

一番上の令嬢も、さすがにその後に残された床の、原田に一番近い位置を嫌つた。
 「いゝぢやないの。姉さん。その代り一人だから。」

「さうね。ぢや仕方がないわ。」

そんな事で、彼女たちも殆ど着のみ着のみ、それ／＼選んだ床に、枕を並べて眠りに就いた。小野の方からひそかに窺ふと、その長女の冬子嬢は、原田の向うにできるだけ間隔を取つて、一番後から床に就いたが、まだばち／＼と眼を開いて、天井のどこかを眺めてゐる。白い横顔がくつきり見えた。小野は併しそれを窺ふと、自ら恥しいやうに感じて、目をそつと外らして了つた。先師の令嬢に興味を以て、ひそかにその寝顔を偷み見る、そんな事は許されぬやうな気がしたのでつた。
 が、その時、傍に寝てゐた原田が、突然かう令嬢に話しかけるのを、彼は聞かなければならなかつた。

「冬子さん。お父さんがお亡くなりになつて、是から淋しいでせうね。」

「えい。」冬子嬢の氣の乗らない、併ししつとりした言葉があつた。「でもそんなでもないわ。もしこれがお母さまだつたら、私たちはどうしていゝか解らないでせうけれど。」

「さうですかねえ。」
 それだけの事ではあつたが、小野はさう親しげに冬子嬢に向つて、話しかけ得る原田の身を、その時漠然と羨望するの念に、ひそかに囚へられざるを得なかつた。

一旦醒めた彼の眼は、滯りに拘らず暫らく眠れなかつた。

葬式の日、寒々と晴れてゐた。

葬儀は齋場やその他の都合で、午前十時から始まる事になつてゐた。それで門弟たちの大部分は棺に從つて馬車で来べき大寺氏その他の、二三の主だつた人々を除いて、殆ど凡て葬場係として、朝早くから青山齋場へ赴く事になつてゐた。小野も勿論その中に加はつて、勝見家に於けると同じく、黒田や原田と共に、受付係を勤める手筈だつた。さうしてその受付には、第二日目になつてやうやく駈けつけて来た柳井も、一員に加はつてゐた。彼は赴任早々の學校の用務を、慌て、片づけて来たのだが、来て先生の死顔に對面し、未亡人に初めて挨拶と弔詞を述べると、もう小野たちと共に、忙中の人とならなければならなかつた。黒いフロックを細い身體に着け、悲しげに髪を額上に亂した、蒼白い彼の風姿は、遅れて加はつたためか、何となく痛々しげに目についた。

皆は出掛ける前に、先生の遺骸に向つて、最後の告別をした。

遺骸はもう棺に入れられて、書齋の一隅に白布に包まれて、安置されてあつた。彼らはその前に立つて、未亡人が恭しく蓋を開いて呉れた後から、順々に頭の方へ寄つて行つて、もう二度とは見られない死顔をぢつと拜さなければならなかつた。

小野も他の弟子たちと一緒に、柳井の後から静に進み寄つて、棺の中を恭しく覗き込んだ。先生の顔はもうすつかり土氣色に變つて、隆鼻はもとのまゝながら、眼蓋の處だけ少し薄白く閉ざされ、頬は歪んだやうに落ち、銀白の疎毛も光りなく、南無阿彌陀佛と書いた細な紙片に包まれて、土で拵へた像のやうに、重たげに仰向けられてあつた。併しそれは明け放れた朝の光りと、絶えぬ蠟燭の灯影とで、非常に尊嚴な形に見えた。小野はそれをぢつと見凝め、何とはなしに濡ふ死人の匂ひと、微かな樟腦のやうな香りを深く吸ひ込んで、また恭しく頭を下げた。そして後の杉浦に席を譲つた。

棺の頭の處には、未練がましく停滞する人々を促すやうに、手で順々に立去る指圖をしながら、フロック姿の松本式部官が、監督のやうに立つてゐた。小野はそれでももう最後だと思ふと、場所を譲りながらもう一度振り返つて立寄り、松本氏に叱責されるやうな眼を見せられると、不服さうに立去らねばならなかつた。

かうして連れ立つて外へ出ると、まだ消え残つてゐる曉靄が、うす灰色に四邊を罩めて、見返る庭前の破れ果てた芭蕉に、しらんと朝日がさし初めてゐた。門弟たちは三々五々、柳町の停留所まで歩いて、そこから青山へ行くべく電車に乗つた。

齋場へ行つてみると、そこがらんとした控所の大きな爐にはもう炭火が、かつかと熾されてあつた。準備とは云つても、もう葬儀屋の人夫たちが、手早く整へて呉れたので、何ら爲すべき事もなかつた。齋場の中は黒と白の布を以て、悲しくも清々しく柱を掩かれ、白木作りの祭壇が新しく調へられてあつた。會葬者の席の椅子も、平常より増して、遺漏なげに並べられ、霜に濕つた前庭も、すつかり掃き淨められてあつた。門弟たちは仕方なしに爐の傍に集つて、色々な雑談を交しながら、時間の來るのを待つた。そして話は會々その場にゐない松本氏のことと及んだ。氏は恰も自分一人が先生の門弟であつて、殆ど専斷的に事を行ふといふので、端なくも非難されたりした。小野はそれを聞いてゐながら、自分はそれ程にも感じてゐなかつたが、なか／＼門弟同志の間にも、喧しい排擠に似た感情のあるのを、漠然と感ぜざるを得なかつた。

その中にやがて時間は来て、早い、手傳ひ旁々の會葬者などが、もうちらほら見え出したので、葬場係は各々その部署に就いた。小野はまた黒田や原田たちと一緒に、一方の天幕張りの受付所に立つた。柳井は向ひ側の建物に附屬してゐる受付所に、別れて他の人々と控へた。杉浦は、まだ學生だ

といふので、車馬の應接と監督に任ぜられて、入口の街路の中央に立つて、人力車や自動車の待つて来る車馬の乗りすてられた車夫や運轉手に、「どうか彼方で待つてゐて下さい。」などと呼んでゐた。會葬者はだん／＼數を増して來た。而して後から後からと来る人々で、兩方の受付は益々繁忙を極めた。それは可なり有名な識者階級の殆ど凡てを集めた觀が在つた。學者、著述家、操觚者、さういふ人々は殊に多かつた。小野は日頃知らぬ、さういふ有名な、殊に作家たちの名刺を受付けると、何となく自分の身が、光榮あるやうにさへ感じて、熱心に應接に従事してゐた。

さうかうしてゐる中に、藤見郎を發した葬列の馬車は、金色の棺を中心にして式場へ着いた。人々の肅然と迎へる中を、棺は下され、導師の僧たちや家族の人々が續いて下りた。未亡人初め令嬢たちは、悉く白無垢の葬服を着てゐた。たゞいつもと同じく、曉星小學の制服を着た二人の少年が、澤山集まつた會葬者を遠慮なくじろ／＼見廻しながら、手を曳かれて奥の休息所の所へ行つた。令嬢たちの姿は、純白に裝飾なく装はれて、いつもより更に楚々たる清々しさを帯びてゐた。

時間は迫つて、會葬者は更に一頻り受付の小野たちを忙殺させた。人々はやがて葬式が始まりかけても、陸續と後を断たなかつた。それで尙も暫らく彼らは、受付の事務を打つて、式場に赴く事は出来なかつた。既に會葬者たちは、控所から葬場へ入つて行つた。そしてもう緩やかな鐘鼓の聲は、莊重に靜肅に流れて來た。皆はもう行かうとして、一應誰か許しを受けに行つた。と、

「もう少し居て呉れなければいけない。」
と、葬場係の主任たる松本氏から、又さういふ命令が在つた。が、それを聞いて第一に黒田が憤慨し出した。

「何だつて。もう式が始まつてゐるのに受付になんぞ居られるものか。僕たちは何も受付に備はれて來てゐるんぢやないから、此の大事の葬式に、列席せずになんぞ居られるものか。いゝから、構はない。行かう。行つて席につかう。」

受付の人々はすぐ賛成して、凡てを打ちすて、葬場の方へ赴いた。熱心な事務家も、さういふ點では露骨に藝術家だつた。後は日出新聞社から手傳ひに來て呉れた人が、苦笑しながら守つて呉れた。受付に居た人々の後から、柳井と連れ立つやうにして、小野が入つて行つた時、もう式は疾うに始まつて、鎌倉からわざ／＼來て呉れた、先生と相識なる有名な禪師が、既に棺前に進んで、莊重に禮拜してゐるところだつた。小野は他の弟子たちと一緒に、もう空席もないので、後の壁際に立つて、肅然と襟を正しうした。今の先刻の憤慨などは、眼前の正面にある白い祭壇を見、老師の足取りや禮拜に連れて、縫ふやうに時々起る緩やかな鐘聲を聞くと、すぐ鎮まつて了つた。會葬者の咳の音が、耳につく程彼の心は鎮まつてゐた。

一通り禮拜を終つたらしく、やがて老師は棺と向ひ合つて、正面に置いてある朱塗りの禪榻にゆつたり身を下ろしたが、鏞を含んだ沈重な音聲で、朗々と偈を下し始めた。そして其終ひを結んだ「喝！」といふ聲は、小野の耳にも居すまひを正す程鋭く響いた。

と、其時、一時途断えてゐた鐘と笛の音が、咽ぶやうに起り始めた。そしてそれに連れて、並居る僧たちは聲を合せて、緩く靜かな讀經を始めた。それを聞くと先生が死んで以來、今まで繁忙な用務のために、悲しみを忘れた如く紛らせられてゐた小野の心も、すつかり葬場内の靜寂と嚴肅な空氣の中で、感じ易く和ませられて了つた。彼の心には初めて泣くのを許されたやうな、一種の宗教的な餘裕が生じて來た。が、併し彼は泣けなかつた。四邊には見知らぬ會葬者や、又見知つた文學者などが

一ぱいに充満してゐた。そして其中で、威つゝい大の男が泣き出したりしては、物笑ひの種になりさうな氣がした。彼は目に正面の白い柩を見、耳に讀經の聲と鐘の響とを聞いて、だん／＼いろ／＼な先生が在つた日の、温容や慈語を思ひ出して、喉の底が熱くなるのを感じながら、一生懸命にそれを堪へてゐた。

讀經の聲と敲鐘の響とは、益々急調になつて行つた。緩やかなゴーンといふ梵鐘と、其間を縫うてカインと響く澄んだ鉦の響、無慈悲な餘韻のない音と、ボク／＼と單調に刻む木魚の音、それらは異様に交響し、旋律を作つて、堪へ得ぬ思ひに小野の感動を唆つた。が、それでも彼は一生懸命に、それを堪へてゐた。彼の丁度前の椅子には、彼より二三年前に大學を出て、當時創作に従事してゐた、ある非感傷的な作家がゐた。そして其人は時々振り返つては、友人である小野や柳井を、甘いと言つて嘲笑する傾向を持つてゐた。其人は時々振り返つては、友人である小野や柳井を、先刻から顧みてゐた。それで小野は其人の前だけでも、せめてそんな取亂した泣顔などは見せたくなかつた。彼はちつと前にゐる其人の、太い赤みを帯びた健康な頸筋を眺めて幾らか憎々しい思ひに満たされながら、なほも堪へなければならなかつた。

と、突然、小野たちの一團の、前横の方に立つてゐた浦山といふ人が、急に堪へられないやうな、咽び聲を揚げた。小野は最初殆どそれを、くつ／＼笑ひ出したのかと思つた。見ると彼は、今迄引堪へてゐた息を、一度に逆らせたやうに、肩を慄はせて欬り上げながら、横を向いて小野たちの方に顔を俯向け、急いで手中を顔に押當てた。

それを見ると、小野も堪らなくなつた。そして思はず、傍に居る柳井と、救ひを求めらるやうな顔を見合せた。同時に柳井も黒い清澄な三角目に、一ぱい涙を溢らして、ちつと此方を見返つてゐた。二人は、周圍を忘れて泣いた。

其中に讀經は終つて、そして簡單な二三の弔詞が讀まれた。それは故先生の遺志で、凡て辭退する譯になつてゐたが、先生が關係してゐた新聞社の社長から、折角来たのが一つあつたため、それと友人總代のと、門弟有志のと三つだけ、質素に捧呈する事になつてゐた。

小野は涙に満ちた眼で、友人總代の加能氏の後から、自分たち門弟を代表した、フロック姿の太夫氏が、前屈みに歩みを運んで、無言に弔詞を捧呈するのを、感銘深く見て取つた。そして今更ながら此人の光榮と、其敬虔な態度とに、漠然たる尊敬の念を覺えた。

それから、遺族の禮拜が始まつた。氣丈な未亡人はさすがに、泣顔を見せはしなかつた。が、其すぐ後から、長女の人に手を曳かれて、新太郎少年が、導師を怪訝な顔で見返りながら、引張られるやうに焼香に進んだ時は、一旦収まりかけた涙が、更に油然と小野には湧いた。少年は柩の前で、長女に教へられると、殆ど驚擱みに香を取出して、それからびよこりと頭を下げた。小野の目はそれと共に、白無垢を着た其女の、割にすらりとした姿に、注視を與へずにはゐられなかつた。彼女もさう泣き伏した跡もなかつた。

其後から、爾餘の令嬢や令息たちが焼香した。親戚の方々が續いた。其頃から會葬者は、もう式が終つたので、立上つて歸りかけてゐた。弟子たちの主だつた人や、會葬者中の親しかつた人々などは、順次に列を作つて、進み出て禮拜して行つた。小野も柳井と共に、それまで壁際にちつととしてゐて、會衆の立去るのを待つてゐたが、もう後は殆ど近親の人ばかりになつたので、連れ立つて進み出ると、

其棺前に立つて香を捧げた。

小野は其時、目前に近く、瀧のやうに垂れ下がつた膝見漆石の柩といふ、白い庵を仰ぎ見ると、不思議に又涙が夥しく湧いて来た。一緒に焼香した柳井も、涙をとどめ敢なかつた。二人は互に手を取り合ふやうにして、薄暗い人目のある葬場を逃れ出ると、其處の横手から裏手へ出て、まだ残つてゐる會衆の見てゐないのを、幸思ふまゝに涙を流した。……やがてやうやく涙を収めて、氣がついて見ると其處は、齋場の塵溜でもあるらしく、落葉や紙屑に交つて、卵の殻などが白く冬日を照り返してゐた。

二人が再び齋場の入口へ戻つた時、もう凡ての人の禮拜は終つて、柩は再び人夫に依つて、門前の馬車へ擔ぎ送られようとしてゐた。小野たちはそれを見送つて、更に馬車の停つてゐる處まで、後を慕ふやうに従ひて行つた。

柩は再び金色の柁を取つた、悲しみの馬車へ載せられた。そしてそれを火葬場まで送るべき、家族の人々や主だつた友人門弟も、それ／＼黒塗の馬車中に打乗つた。

小野は他の弟子たちと一緒に、其處の道傍に立つたまゝ、其葬列を見送らうとしてゐた。

ふと、氣が付いて見ると、偶然、彼の正面の目の前にある馬車に、長女の冬子嬢が乗つてゐた。その白無垢を着た、清々しい姿が、黒い馬車の窓枠に仕切られて、恰も額縁へ飾られた繪のやうに、白く鮮かに見えてゐた。衣裳が純白なために、顔はやゝ色澤が悪く、目の下などはさすがに擦り赤めて、やゝ黒ずんで見えたが、其果やう恍惚したやうに、ある一點をぢつと眺めてゐる形は、小野の心にある深い印銘を落さずには措かなかつた。

併し、恐らく無意識にはあらうが、彼女のぢつと目を落して、動かさずゐる視線を辿つて、其

方向を見ると、其時には大學の制服を着て、両手をポケットに突込んだまゝ、儼然と柩車を眺め入つてゐる杉浦の黒い姿が在つた。

小野は其時既に、漠然たる嫉妬と恐怖とを、その薄い冬日を浴びて、陰氣に立つてゐる杉浦の黒い影に覺えた。

やがて馬車の列は火葬場に向つて動き出した。

三

その夜小野は一とまづ下宿へ歸つて、數日來の疲れを休める爲に、ぐつすり眠つた。先生の死後三日の間、膝見家にはかり起居してゐたので、下宿の布団は冷たかつた。併し彼は初めて一人になつたので、沁々と色々な事を思ひ出しながら、淋しいが安らかに床に就いた。先生の死、それは勿論悲しかつた。いろ／＼な追憶に連れて、彼はそつと涙ぐむ事もあつた。が併し彼の心の奥には、先生の死を機會にして、何となく彼の世界が廣まり、何物か芽ぐんで來たやうな、漠然たる幸福感を、時々感ぜざるを得なかつた。そしてその葬式も、滞りなく終つた今日、何となく満ち足りたやうな思ひで、すぐ眠りに就いて了つた。明日の事を思ひながら……

翌朝眼醒めると、彼はすぐ今日は、膝見家の人々と共に、先生の骨上げに行く約束をした事を、はつきり脳裡に浮ばせた。そして何となく光榮なやうな、嬉しい思ひで飛び起きた。雨戸を繰つてみると、下宿の蔭に満ちた裏庭にも、輝かしい白い冬の朝日が、斜に外れてさし込んで、枯木と屋裏の間から、着い冬空が磨いたやうに見えてゐた。彼はその美しい日影を眺めて、今朝八時迄には必ず膝見家へ行つて、骨上げのお伴をするといふ約束の時間に、もう遅れたのと思つた。そして取り敢ず急い

で、冷たい着物を着換へた。

さうしてゐるところへ、女中の足音がばた／＼として、襖を開けると彼の室へ現はれた。

「あら小野さん」女中は襖を開けると、少し意外な顔付で目を睜つた。

「もう起きてゐられたの、今朝は不思議ね。」

「今起きたばかりだよ。――だが何だい慌てゝ？」

小野は帯を締めながら、かう問い返さざるを得なかつた。

「お電話よ。勝見さんから。――それで今、貴方がまだ起きてゐらつしやらないからと申上げたら、早速起して下さいつて仰しやるのよ。だから早く出て下さい。」

「さうか。そんなら早く云へばいいのに。」小野は勝見家からと聞いて大抵用件は分つてゐるが、そんな風にわざ／＼電話までかけて呉れたことを、恐縮と共に嬉しさを覚えて、駈けるやうに電話口へ出た。

「もし／＼。お待ちせしました。僕、小野です。勝見さんですか。」

「え、さうです。」受話器の中では、少し鏗を含んだやうな、中音ながら和やかな女の聲があつた。「貴方、小野さん！ 私、分つて？」

「え？ 誰方です。」

小野は思はず問ひ返した。勝見家には、梅やといふ女中があつて、その女中は毎も木曜會に行く度に、取次に出る馴染でもあり、又その後奥さんが何かの序に話したことに依れば、或る時夏のことだが、夫人は一體どんな弟子たちが、木曜會に集まつて来るのかと思つて、玄關の正面の簀戸の蔭にゐて、来る人々をひそかに観察してゐた時、小野が訪ねて来たのを見て「あれが柳井さんかい」と

尋ねたら、その梅やが言下に、「いいえ、柳井さんはもつと綺麗な方ですわ。」と答へて、夫人に小野の名を教へたので、夫人の方では、小野を、昔から少しは知つてゐたことだつた。そしてその話を梅の前でしたところが、『あら奥さん、嘘でございますわ。そんな失禮なこと、小野さんについて申上げたことはございせんわ。』と辯解したが、その時座にゐた門弟どもから、『そんなら今は小野さんに、十分好意を持つてゐるのだな。』などと冷かされたり、似合ひの夫婦なども、揶揄はれたり、それに對して小野は、内心どれ程胸を痛めたことか！ そんな冗談を混雑な用事の間にも云はれて、幾らか馴染になつてゐたために、或ひはその梅やが電話で、そんな親しい口をきくのかと、一時鳥渡思つたのだつた。それ以外の人からは、彼はまるで思ひもよらなかつた。

受話器の中では、もう一度低い甘い聲音が響いた。

「わたしよ、私。――解つて？」

「あー！ 小野は突如としてその聲に、忘れ得ぬ調を思ひ出した。そして思はず動悸の高まるのを覺えた。冬子さんですか。どうも失禮しました。」

「え、さうよ。寝呆けてゐらつしやるのぢやなくつて。まだお寝みになつてゐたんでせう。」

「いいえ、もう起きてゐました。それを女中が知らなかつたんですよ。」

小野は少し息の喘むのを、抑へるやうにして云つた。

「嘘仰しやい。電話に驚いてお起きになつたんでせう。随分お寝坊さんね。もうお約束の八時よ。」

「どうも濟みません。もう皆さんお出かけになりましたか。」

「いいえ、皆、もうとうに支度が出来て、貴方がたの来るのを待つてゐるのよ。それで私電話をかけたのよ。お母さんもうお待ち兼ねよ。早く杉浦さんを誘つていらつしやい。早くいらつしやらない

と駄目よ。貴方がたを置いて行つて了ふことよ。だからすぐいらつしやい。」

「さうですか。それはどうも濟みませんでした。ではすぐ参りますから、どうかそれ迄是非お待ちになつてゐて下さるように、お母さまにお願ひして下さい。是からすぐ参りますから。」

「私も行くのよ。だからすぐいらつしやならなくちや厭よ。」

「さうですか。すぐ参ります。すぐ。……どうも有難うございました。では左様なら。」

「左様なら、早くいらつしやい。」

その電話は、小野の心に或る驚きと、深い喜びとを齎すのに、十分だつた。少くとも冬子さんは、まだ知つて日の浅い自分、直接電話をかけて呉れるだけの、親しみを感じてゐる。それだけで既に彼の心は、先生の骨上げに行くといふ悲しみを忘れて、今日の日のやうに晴々としてゐた。

小野は朝飯もそこ〜に、洋服に着換へ終ると、近所の五丁目にある杉浦の下宿へ、誘ひに寄つた。

小野は杉浦の顔を見ると、かう云はずには居られなかつた。

「今の先刻ね。お嬢さんから直接電話がかゝつて来てね。みんなもう待ち兼ねてゐるから、すぐ来いといふんだ。だから早く支度をし給へ。」

「ふうむ。さうか。ぢやすぐ着物を着換へよう。」

朝寝の杉浦も、まだ起きたばかりらしかつたが、別に深く氣にもとめずに、例の儼然たる顔をして、さうして支度にかゝつた。そしてすぐそれは出来上つた。

二人が勝見家へ着いた時、もう自動車は呼んで在つた。彼らが門を入つて行くと、その足音を聞きつけて、冬子嬢が離室の口から、急いで迎へるやうに出て來た。

「しら〜や。遅いのね。あれからもう三十分も経つてよ。」

「さうですか。どうも濟みませんでした。」

かう云ひながら小野は、昨日の白無垢とは違つて、前々日のやうな黒紋付の上へ、紫紺色の無地の羽織を、簡単に羽織つて、袴を穿いた女學生風の姿を、ひそかに嬉しく見守つた。もう彼の心には、親しみを覚えて呉れる嬉しさ以外に、杉浦に對する漠然たる嫉妬の芽などは、それだけでもう在り得なかつた。杉浦と彼女とは、たゞ『いらつしや。』といふやうな挨拶をしたきりだつた。

小野と杉浦とは、靴を脱いで上るまでもなく、その儘、待ち兼ねてゐた夫人と新太郎少年や、大寺氏、黒田、原田などと共に、自動車に打乗つた。そして直ちに早稲田の町々を過り、幾曲りか曲つた後、郊外の街道をまつしぐらに、落合の火葬場へと向つた。

前の車には、夫人と新太郎少年と冬子嬢と、そして大寺氏とが乗り込んだ。後の車には黒田と原田と杉浦とさうして小野と、若い人たちはばかりが乗つた。

自動車は衝衝を抜けて、並木や生垣の多い、郊外の里道へ出ると、適度の速力を加へて、快く走つた。晴れた冬の朝風は、少しびり〜頬に沁みだが、皆は意ともしなかつた。そしてかなり、快活な気分、前を行く自動車を追うた。

「悪漢追跡！」

などと如に沿うた一筋道にさしかゝつた時、小野は喜んで云つたりした。

前の自動車からは、新太郎少年と共に、冬子嬢の時々後を振り返るのが、背ろ窓を通して見えたりした。そして樹木の多い郊外へ出ると、それらの幹を白く輝かしてゐる様子の木が、前の自動車の車體の上へ、更に黒い縞のやうな影を投げた。その縞は隣くうちに變つた。

やがて自動車は、小高い丘の道の上ると、向うの窪みになつた處に、火葬場が見えた。それは赤い

煉瓦造りの、小さな工場といった形で、日を受けて灰色の煙筒からは、まだ一抹の煙がかすかに漂ひ出た。丘の畑には麥が青々としてゐた。そしてそこら一めん、南を受けた日を浴びて、如何にも郊外らしく長閑なのが、赤い建物と對照されて、人々に物悲しい思ひをさせた。門内で自動車を下りると、何となく厭な臭が、殆ど氣のせむかと思はれる位微かだが、小野の鼻をそつと擽つた。その休憩所には別に來た先生の親友の中野氏や、一二の弟子たちが待ち受けてゐた。小憩する間もなく、夫人を先登にして、皆は薄暗い焼場の建物の中へ入つて行つた。そこは内側をセメントで疊んだやうな、陰氣な灰色の室だつた。そしてその一方に、煉瓦で疊んだ竈の口が、赤黒い鐵の扉を見せて、二つ三つ並んでゐた。そして奥の一つにだけ、紫色の幔幕が、唐突と垂れ下げられてあつた。それが特等で、先生の遺骸を入れた悲しみの竈だつた。夫人はつとその前に進み寄つて、手を合せて禮拜したが、早速その竈の口の封印を改めると、隠亡に鍵を手渡した。隠亡は、殆ど普通の人と同じやうな表情で、黙つてその鍵を受取ると、がちやんがちやんと二度音をさせて、その鐵の扉を右に開いた。と薄暗い竈の中に、もうたゞ白いものが堆く粉々になつて續いてゐた。と、隠亡は今度は竈口の前へ、臺のやうなものを据ゑ、その上へ鐵軌をかけ渡して、再びぐわらぐわらと音を立てたと思ふと、その骨灰を載せた細長い鐵板を無慈悲にそこへ引張り出した。

堆く、處々灰を被つたまゝ盛り上つて、先生の遺骸はもう形を止めずに骨となつて残つてゐた。そしてその頭のところには、紛れもない頭蓋骨が、少し形を崩してゐたが、圓くはつきり残つてゐた。人々は息を窒らせて、その變り果てた骨灰に見入つた。隠亡はいち早く、その中から頸骨を選び出した。

「是が咽佛です。」

夫人はそこで調へた麩に、まづその骨を取上げて、靜かに納めた。それから頭蓋骨を恭しく拾ひ入れた。と、傍から隠亡が、灰を被つた脊骨や大腿骨などを、それ／＼取出して見せた。夫人と新太郎少年と冬子嬢とは、それをまづ銘々に拾ひ納めた。友人門弟の人たちも、その後から白い木の箸を以て、それ／＼一つ位づゝ大きな骨を、その麩の中へ拾つた。と、やがて大きな骨が無くなるのを見て隠亡は人々を押しのけながら、

「さあ、後は此方の臺の上へあけますから、此處でよくお拾ひなさい。」

と、一つの卓子のやうな臺の上へ、灰もろともさら／＼と鐵板からあけた。人々は胸を痛めながら苦笑して、その隠亡の詭へ向きな手荒な所業を見てゐたが、忽ちその臺のぐるりに集まつた。そして離々とした先生の骨を、先を争ふやうに拾ひ始めた。

小野の位置は、その時偶然冬子嬢の、すぐ隣りに當つてゐた。そして白い箸を持つた彼女の手は、屢々小野のそれと空間を隔て、交叉した。

「齒はみんなありますか。冬子さんも新太郎ちゃんもよく數へて拾つて下さい。」

夫人はかう云つた。

人々は齒を見つげ出すと、それを家族の人々に知らせて、拾ひ上げさせるやうにした。小野も殆ど幾らか意識的に、それを見出す度に、傍の冬子嬢に知らせるやうにした。

「あゝ、又此處にも一枚ありましたよ。」

「さうですか。」

小野の箸と冬子嬢の箸とは、互に鳥渡觸れ合ひさうになつた。

第 六 章

葬儀が滞りなく済んで、表立つた用務も殆ど無くなつたが、併し勝見家と弟子たちとの交渉は、それだけでは切れて了はしなかつた。それどころか、猶殆ど毎日のやうに、小野らは勝見家へ行つて、雑談半分に家用を足したり、未亡人や子供たちの相手をしたりして、益々親しくなつて行つた。殊に未亡人の提言に依つて、先生歿後の勝見家には、二人の少年の外、一人も男つ氣がないといふので、弟子の中の差支ない人が、一人づゝ宿直として、勝見家へ泊る事になつたので、交渉は益々深くならざるを得なかつた。勿論未亡人の手頼りとする男性として、先生の長兄に當る長三氏が、榎町の伯父さんと呼ばれて、——近所にはゐたが、晝間は早くから勝見家へ来てはくれるが、夜になると、必ず歸つて、自家へ泊らねばならぬ人だつた。だから何か萬一の場合に備ふるまでもなく、先生の遺骨を安置した、書齋の間を宿直すべき土が、必ず一人は必要だつた。其上良人を失つた未亡人として、深夜まで位牌を守るに就いては、相手なしには餘りに淋しい事だつた。それに未亡人は、元來からいつても、若い書生を部下に置いて愛護してやるといつたやうな一種の「姐御」氣性が多量に在つたので、さう云ひ出したのも無理はなかつた。さうしてそれにはもうそれぞれ一家を持つた、先輩の弟子たちは都合が悪かつた。それでまだ下宿にゐる小野だとか、黒田だとか、林原だとか中山だとか、杉浦などが順々に、日を定めて當直することになつた。

「あ、冬子さん。」夫人が突然傍から云つた。「箸から箸へちかちか拾つて貰つてはいけませんよ。」

「あら、さう？」

冬子は箸を慌て、引いた。

小野は自分が叱責されたやうに、心中ひそかに赤くなつた。そしてかういふ際にも、ひそかに卑しい考へ——といふ程でないにしても、他の雑念を持つことを、先生に對しても濟まないと思つた。そして今度は専念に、先生のことのみ思ひながら、骨を見出すやうに努めざるを得なかつた。その人々の手に依つて、骨片は殆ど拾ひ盡された。と、それを待つてゐたやうに、又隠亡は現はれて、

「では、もう後は飾ひませう。」

と云ひながら、それを大きな灰飾に入れた。飾の底にはまだ小さな骨片が、手で掬へる位残つた。隠亡はそれを藪の中へあけると、少し高ばつて蓋が出来ないのを、無理に押し潰して蓋を被せた。もう隠亡の所業には馴れてはゐたが、小野の胸は又少し痛んだ。

それで骨上げは済んだ。

歸りの自動車には、小野たちの間へ、骨壺を携へた新太郎少年が、割り込んで乗つた。それで恰も四天王のやうに、遺骨を護衛してゐる形になつたに拘らず、少年の快活な言動は、車内を往きより一層賑かにした。

強ひて持へた悲しみの面などを、故先生は喜ぶべき筈もなかつた。併しながら小野には、今日の悲しかるべき骨上げが、何ものかのために、何となく楽しいやうな氣がしたのを、道々先生に濟まなく思はない譯には行かなかつた。